

主な行事予定(2019年11月~2020年3月)

HUSキャンパスイルミネーション2019

12月2日(月)~12月25日(水) (点灯時間)15:30~21:00
 11月23日(土・祝) 13:00~ キャンドルホルダーワークショップ(A棟食堂)
 12月2日(月) 17:00~ HUSイルミネーション点灯式(中央棟前及びホール)
 12月6日(金) 17:00~ クラブ学生パフォーマンス(中央棟ホール)
 12月20日(金) 17:00~ 札幌国際情報高校吹奏楽部dance&playing(中央棟ホール)
 12月25日(水) 17:00~ PMF(札幌オペラカルテット)クリスマスコンサート(中央棟ホール)

11 NOV

2019

- 4日(月) 科学“大”実験
 (場所:札幌市青少年科学館)
 5日(火) 第3期定期試験(薬学部4年生)
 (~6日(水))
 11月(月) LAAN×北海道立総合研究機構協働セミナー
 「北の暮らしを支えるモノづくり」
 23日(土・祝) 卒業研究発表会(看護学科4年生)
 24日(日) まちかどキャンパス
 (場所:紀伊國屋書店札幌本店1階インナーガーデン)
 25日(月) 第3期定期試験(薬学部3年生)
 (~27日(水))
 26日(火) 第3期定期試験(薬学部1・2年生)
 (~27日(水))

12 DEC

2019

- 27日(金) 冬季休業開始
 (~1月6日(月))

◆公開講座開催のお知らせ◆

- 11/7(木) 北前船による港の活性化と文化の醸成～チェンバロ演奏と共に (場所:北海道科学大学)
 都市環境学科 客員教授 明楽みゆき 氏
 12/7(土) なぜ今自動運転なのか (場所:図書館)
 自動車工学科 城戸 章宏 教授
 1/27(月) インソールの正しい知識 (場所:北海道科学大学)
 義肢装具学科 清水 新悟 准教授

*上記は予定であり、内容が変更となる場合があります。※各講座の詳細、申込み方法などの最新情報については本学ホームページ(<https://www.hus.ac.jp>)でご確認ください。

読者アンケートにご協力お願いいたします

今後よりよい誌面づくりのため、ぜひ読者の方のご意見をお寄せください。アンケートは、本学ホームページのWEB回答フォームよりご回答ください。
 ※集計した回答は統計情報の作成及び広報誌制作における参考資料としてのみ利用し、回答者個人が特定されることはありません。

読者アンケート回答フォームURL ▶ <https://www.hus.ac.jp/info/enquete/>

NEWS LETTER

Vol.37 / 2019 No.2 2019年10月21日(第208号)

- 工学部
 機械工学科 / 情報工学科 / 電気電子工学科
 建築学科 / 都市環境学科
- 薬学部
 薬学科
- 保健医療学部
 看護学科 / 理学療法学科 / 義肢装具学科
 臨床工学科 / 診療放射線学科
- 未来デザイン学部
 メディアデザイン学科 / 人間社会学科
- 短期大学部
 自動車工学科



Contents

- 01 特集1 +PIT
- 03 特集2 HUS密着レポート
- 05 研究室から
- 06 卒業生訪問
- 07 学科だより
- 09 活躍する学生たち
- 10 HUS news and topics

あたらしい価値を創る



北海道科学大学
組織横断型 活動推進プロジェクト

+PIT (プラスピット)とは?

北海道科学大学では、「北海道の発展・成長に最も貢献する大学」を目指し、学内の教職員を起点に学内外の人や企業、グループと連携し、新たなプロジェクトに取り組むチームを、大学が組織としてサポートする活動 = +PIT (+Professional Innovation Team) を2018年から行っており、現在19プロジェクトが進行中です。

► そのほかの進行プロジェクト

- ・T型フォード再生プロジェクト
- ・音によるエゾシカと車両の衝突回避のためのスピーカーシステム開発
- ・前田キャンパス内の保育園設置

ほか全19プロジェクト

web site > www1.hus.ac.jp/~pluspit/

プロジェクト No.15

「ていね夏あかり」の新たな展開に向けた、地域連携活動のあり方を考える。



プロジェクト代表

濱谷 雅弘 教授 未来デザイン学部 人間社会学科

1981年 北海道工業大学 工学部 建築工学科卒業(工学士)
2005年 北海道工業大学(現 北海道科学大学)人間社会学科 教授 / 一般社団法人北海道まちづくり協議会 相談役 他

Chapter.2

「ていね夏あかり」が、
もっともっと地域のお祭りとして
根付いていくために、
「+PIT」がひとつの転機に。

現在、「ていね夏あかり」は、本学建築学科の谷口尚弘教授と私に加えて学生も所属する実行委員会が運営しています。2人とも大垣先生の教え子で、谷口教授は「ていね夏あかり」が誕生した28年前から、私は15年前から参加しています。

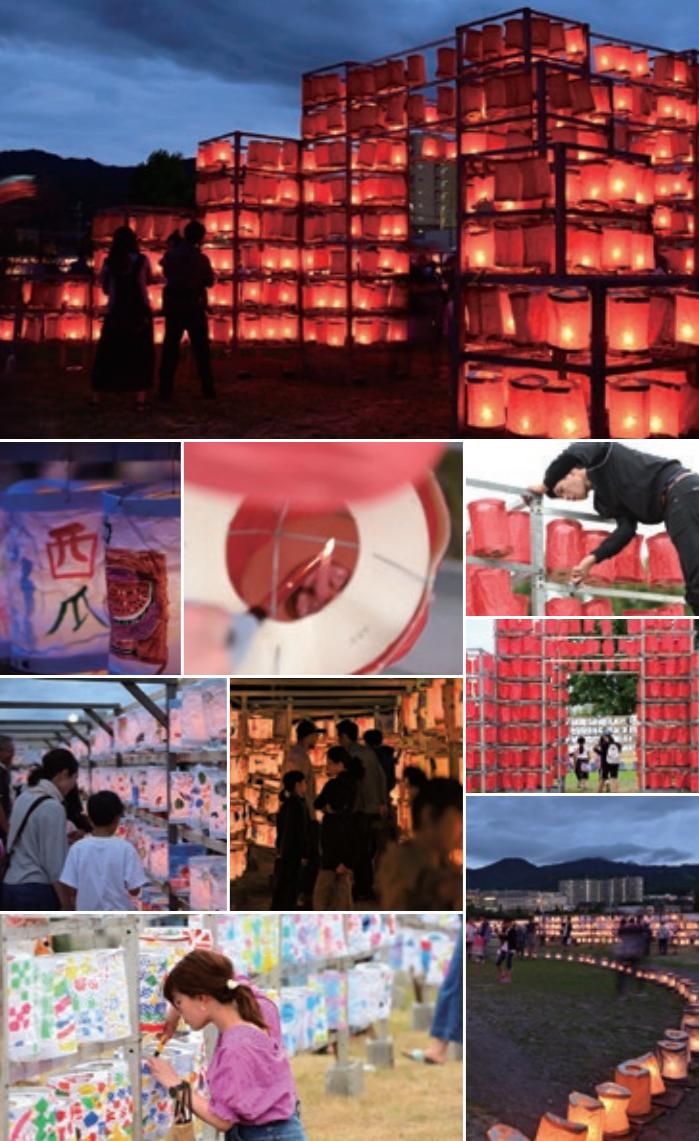
今回、大学が学内のさまざまなプロジェクトをサポートする「+PIT」に応募した背景は、「ていね夏あかり」はこれまで、大垣先生の思いを受け継ぐ私たちや、私たちのゼミ生、また学生有志が活動の中心でしたが、もっと地域の方にも深く関わって欲しい、もっと区民みんなで作り上げていくようなお祭りにしたい、そのため地域にコアなメンバーを育てていく今が新たなステップの時期と捉えたのがきっかけでした。

+PITに採択されたことで学内外の協力者が増え、新たな工具や機材の導入により作業量が軽減でき、実行委員会のほかに新たに幹事会ができました。この幹事会には、地元のさまざまな団体から約8名ほどが参加しており、問題点の洗い出しや、今後の展望などをフランクに話し合う場となっています。幹事会から実行委員会へと意見をつなぐことで、少しずつ地域のお祭りとして、「ていね夏あかり」をみんなで考え、変えていくこと、「+PIT」を転機に新たな流れを作っていくたいと考えています。



▲地域の子どもたちが作った色とりどりのちょうちん。

▲濱谷教授と、イベントに来場された札幌市の石川敏也副市長。



Chapter.1

約10,000個のちょうちんが、夏の手稻を彩る「ていね夏あかり」。 今から28年前に誕生したこのお祭りには、こんな誕生秘話がありました。



▲濱谷ゼミと人間社会学科の学生たち。準備にも熱が入ります!

7月14日(日)、「ていね夏あかり」が開催され、今年も多くの子どもたちやそのご家族、近隣住民の方にご参加いただき、盛大に実施することができました。今年で28回目となる「ていね夏あかり」は、子どもたちが中心となって制作したちょうちんが夜を彩る、手稻区の夏の風物詩で、本学の名誉教授でもあった故・大垣直明先生が発案したものでした。

今から28年前、当時開催されていた区民祭りの存続が危ぶまれ「こんなに大きな区民のお祭りが無くなるなんて」と、学生たちと意見を交わして「ていね夏あかり」が誕生しました。「ていね夏あかり」を発案するにあたり、大垣先生が考えたのが、ろうそくを使った日本伝統のお祭りの文化を、手稻に根付かせたいという思いです。手稻区は西区から分区して今年で30年の新しい街。そこで何か文化の香りがするものを育んでいきたいと考え、そのシンボルとしたのがちょうちんでした。手稻の子どもたちと大学生と一緒にちょうちんを作り、それを点灯することで、手稻に住む子どもたちに夢と感動を与え、手稻への愛着を育み、そして「自分たちの街には、『ていね夏あかり』がある」という“街の誇り”を育てていきたいという構想がありました。

それから28年。大学生が手稻区内の小学校や児童会館を訪問し、ちょうちんの作り方を指導しながら、当日の点灯式を迎えるという伝統は続き、自分の作ったちょうちんを見に、子どもたち、両親、祖父母が会場に訪れ、「良くできたね」と笑顔を交わしています。小学生の頃、ちょうちんづくりを経験した子が本学に進学し、自分の母校にちょうちん指導を行った学生もいます。第1回の開催に携わった学生は今、石狩市で土木建設会社を営んでいますが、石狩の子どもたちにもちょうちんづくりを経験させたいと、毎年、地元でちょうちん祭りを実施しています。

大垣先生が願った街への思い、街への誇り。子どもたちの心に灯ったあかりが、時を超えて、街を超えて、今こうして大きく広がっていることを、本当に嬉しく思っています。

「ていね夏あかり」の成果のひとつとして「ちょうちんづくり」がさまざまな街に広がっています。上富良野、喜茂別、恵庭などの地方自治体を始め、昨年は道外の団体からも依頼がありました。



「ていね夏あかり」に参加した学生たちの声



- ちょうちんづくりや設営は大変な面もあるけど、その中でも学生たちが協力しあって夏あかりが成功して嬉しい。後輩にも頑張って欲しいです。
- 子どもたちが「私のちょうちんだ!」と駆け寄っていく姿を見ると嬉しいですし、やりがいを感じます。
- こんなアイデアを持っていた先輩たちがすごいと思う。私は手稻区出身ではないので、自分の街でも実施したい。

「ていね夏あかり」の軌跡

1992年 「ていね夏あかり」誕生 450個のちょうちんからスタート
1997年 札幌市都市景観賞特別賞 ちょうちんの数が5,000個を突破
2008年 国土交通大臣まちづくり功労者表彰、北のまちづくり賞知事賞
2009年 ちょうちんの数が10,000個を突破

2020年度からは、北海道科学大学が新たな会場に!

来年は北海道科学大学が会場に。

「ていね夏あかり」は、手稻鉄北小学校に隣接する「てっぽく・ひろば」を会場に開催されてきました。実はこのてっぽく・ひろばの閉鎖が決まり、来年度からの会場をどうするかが大きな課題でした。このほど北海道科学大学を新たな会場とすることが決定し、今年の点灯式で会場の皆様に発表することができました。

子どもたちが作るちょうちんは、世界でたったひとつのちょうちんです。そのちょうちんを揺らしながら、親子で一緒に会場を後にする姿を、毎年、心温まる思いで見ています。手稻に生まれた「ていね夏あかり」の伝統を、今後もたくさんの子どもたちと、区民の皆様と育てていきたいと考えています。



▲今年が最後の開催となった「てっぽく・ひろば」会場。



140名が
参加!

HUS密着レポート

第9回 「高齢者元気サポート」 開催!!

看護学
科発案イベ
ントに密
着!

本学看護学学科長の林裕子教授が中心となって、2015年から春と秋の年に2回、継続して開催している「高齢者元気サポート」の9回目を、8月22日(木)に実施しました。今回は、教職員24名に加え、各学科の学生有志74名がボランティアスタッフとして準備・運営に携わり、65歳以上の方140名が参加しました。

高齢者元気サポートが誕生した背景には、地域の方たちに対して「看護学科としてできることは何か」という思いが発端になったと林教授は振り返ります。

イベントの立ち上げにあたり、まずは手稲区内で既に行われている、高齢者を対象とした取り組みについて調べることからスタートしました。リサーチしたところ「手稲一万歩あるく会」や「健康体操」、「エクササイズ」などが実施されていましたが、「イベントを開催すること」が目的で、参加者がその後どう変わったのか、どう変化したのかという「評価」まで行っているイベントがないことが分かりました。それならば、測定に力を入れたイベントを実施しようと健康測定をイベントの柱とし、大学に来ていただくなら健康に関する知識を持ち帰ってもらおうと30分程度の講座を加え、さらに食にも着目し、栄養バランスを考えた昼食を摂ってもらいたいと、徐々に本学看護学科ならではの「高齢者元気サポート」が形作られていきました。

現在の高齢者元気サポートでは、参加者の身体機能測定のデータを蓄積しており、4回以上参加してくれた方には、過去のデータと現在のデータを見比べ評価する“結果フィードバック”的な機会を設けています。フィードバック会場では参加者と看護学科の教員が熱心に話し込む姿が見られ、自分の健康状態を客観的に知ることができる場として地域住民の方から好評を得ています。

看護学科の



はやし ゆうこ
林裕子教授



ふくら かおる
福良薰教授

お話を伺いました。

高齢者元気サポートに参加される方々には自分たちの健康状態を知りたいという目的に加え、回を重ねるごとに私たちスタッフや学生とも顔なじみになり「元気だった?」といった世間話やふれあいを楽しみに来ている方も多く、こういう場を提供できていることが良いことなど感じています。

よく「高齢者元気サポートの今後の展望は?」と聞かれますが、こういった取り組みは1年や2年で成熟するものではなく、10年、20年かけてデータを取り続けることにこそ、意味があるものだと考えています。例えば5年経っても運動機能が落ちない方がいるなら、それはなぜかと原因を探ったり、私たち教員や学生の研究にデータを活用させて頂くこともあります。実際に昨年の卒業研究にも高齢者元気サポートで得られたデータが活かされており、継続するからこそ、見えてくるものがあると考えています。

また高齢者元気サポートは、看護学科だけでは決して実現できませんでした。イベント時には、理学療法学科や情報工学科の教員や学生の協力があり、私たちが着ているオリジナルポロシャツのデザインは、メディアデザイン学科の学生が作ってくれたもの。他にも他学科の学生が、受付マウスをコーディネートしてくれたり、事務の皆さん、食堂の方々と、たくさんのがんばっています。そういう面で、高齢者元気サポートは北海道科学大学でなければできなかったことだと思いますし、一丸となる体制がこの大学の魅力だと思います。

地域に貢献したいという思いは、大学そのものの思いでもあります。これからも看護学科では他学科と連携しながら、地域への貢献、地域への提案を続けていきたいと思います。



▲メディアデザイン学科の学生がデザインしたポロシャツ。

前日の準備からイベント当日をレポート

8月21日(水) 事前準備

イベント前日、会場となるC棟5階のフロアを、高齢者元気サポートの会場にするための設営が始まりました。普段は教室や実習室として使っている部屋から、机や椅子、ベッドなどをまるごと運び出し、新たに医療機器を設置し、血圧測定、運動機能測定、身体計測などができるようにブースをつくります。



▲何十人のスタッフが搬出、搬入、設置をそれぞれ担当。指示系統がしっかりとされているので混乱もなくスムーズ。



▲イベントの実施にあたり「学生の元気が、参加者の方の元気の源です」と学生たちに話す林教授。



看護学科の他にも、理学療法学科、情報工学科などから集まつた学生ボランティアの面々。

8月22日(木) 元気サポート当日

9:00 受付開始

受付開始とともに、参加者の方が続々と来場されました。140名の参加者のうち、新規参加は26名、継続参加は114名と多くの方が複数回参加しています。



9:35 公開講座

新規参加者向けには、松原三智子教授による「あなたの身体は大丈夫?~100歳まで元気で活動するために~」、継続参加者向けには高山望准教授による「生活習慣病と食事」の講座を行いました。健康に関する知識を分かりやすく、時にユーモラスに話す先生方の話を、参加者の皆さんは楽しそうに聞いていました。



10:35 問診票記入&各種測定



問診票
問診票は、健康状態や活動能力を知るために約20の設問を細かく設定。



頑張ってください!



運動機能測定ブース / 身体計測ブース
理学療法学科と情報工学科のスタッフが中心となって、3メートル歩行時間測定、バランス機能測定、立ち上がりの運動機能を評価。和気あいあいとした雰囲気の中、身体計測ブースでは、身長・体重測定、腕・脚丈測定、握力測定を実施。



口腔機能ブース
歯科衛生士の方が来場し口腔内をチェック。また、看護学科の学生が発音測定を行いました。

12:00 昼食

福良教授が考案した「カロリー500Kcal、塩分3g、15品目の食材」の昼食を500円で提供しました。食堂の管理栄養士もメニューづくりに参加し、細かな栄養計算を担当。食事を体験した参加者から、同じメニューを自宅でも作りたいという声があがり、現在はレシピも持ち帰りOK。



測定後 結果フィードバック

4回以上の参加者には看護学科教員による結果フィードバックがあります。これまでのデータをグラフ化したシートで、自分の運動機能にどのような変化があるのかをひと目で分かるように視覚化。健康に関するアドバイスがもらえます。

参加者の声

1回目から参加!
木村博さん(77歳)に伺いました。

「自分としては現在の健康状態を維持できれば十分かと思いますが、少しでも良くなつた部分があれば励みになりますし、弱くなつた部分に対しては、先生方のアドバイスが参考になります。身近な大学でこうした取り組みを実施していることはありがたいですし、皆さんの努力に感謝!」



研究室 から

先生の研究を
のぞいてみよう!



視覚障がいの方が、雪道でも安全に歩けるように。
積雪寒冷地ならではの研究に取り組む
福田先生の研究室に伺いました。

視覚障がい者のための 音サインによる 歩行誘導システム。

工学部 建築学科

福田 菜々 准教授

から10年ほど前になりますが、冬場、通勤中に視覚障がいの方方が白杖をついて歩いているのを見かけ、夏場であれば点字ブロックがあるはずなのに、雪上ではそれが隠れてしまい、非常に歩きづらいのではないかと感じたのが、研究のきっかけでした。対応策としてはロードヒーティングや、点字ブロックにICチップを埋めて歩行の手助けをするといった方法がありますが、どこまでの積雪に対応できるか不明確な面もあり、実際はこまめに除雪しているのが現状。都市やまちづくりを考える分野で働く者として、何か手助けをしたいと思ったのが始まりでした。



積雪で点字ブロックが隠れてしまっている状態。

視覚障がいの方方に音で誘導を促す「音サイン」は、メロディが流れる音響信号や、公共施設の入り口などでポンと鳴る盲導鈴など昔から使われています。しかし、街の中を見てみると音サインは、例えばここが建物の入り口だから、トイレとか、場所を知らせるものが多く、ひょっとすると視覚障がいの方は目的地に斜めにアクセスしているのかも知れない。そこで点字ブロックと同じように「音サインによって経路を示すことができないか」と考えました。



冬季は、雪上にグリッドを引いて実験。

いような音を、と考え「水のせせらぎ音」を使いました。実際に視覚障がいの方に参加いただいて実験をしたところ、最初はズレが大きかったのですが、私が一緒に歩いて「今、経路から2mくらい離れています」など、音の道が想像できるようにサポートしたところ、「歩きやすくなった」「経路を想像しやすくなった」という声とともに、良い結果が得られました。さらに、定常音を使い、かつスピーカーを垂直下向きに設置することで、視覚障がいの方が夏場でも雪道でも、歩くときに地面からの「反響音」を聞いていることを発見しました。反響音は私たち健常者はあまり感じませんが、視覚障がいの方は健常者よりも微細な変化を読み取って、反響音の広がりや音色の違いを、歩行に役立てていることが分かりました。この研究により、視覚障がいの方方が直接音と反響音の到達時間のズレによる微妙な音の変化を歩行の手がかりにしていることを解明し、このことが認められ、日本建築学会奨励賞を受賞しました。

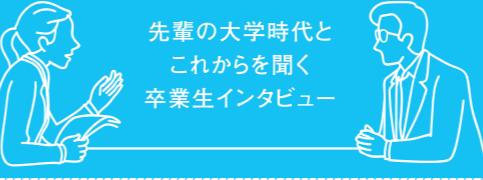


実験に実際に使ったスピーカー。手作りの装置で実験を進めました。

これまでの研究から、視覚障がい者の冬道の歩行に関し、音サインがかなり有効に働くことが分かりました。次のステップとしては社会実験や実用化への道が考えられますが、今ある生活音の中に音サインが加わることで、視覚障がいの方方がどのくらい聞き分けることができるのか、どのくらいのボリュームが適正なのか、そして、その音が健常者にとってストレスにならないかなど、実用化にはまだまだ多くの課題があります。ただ、例えば点字ブロックが敷設されている部分は優先的にスピーカーを設置し、冬道歩行の安全を図るといった、音の道を作る方法も考えられます。健常者にとって、視覚障がい者にとって、冬道の歩行が安全であるような、共存の方法を模索していかたいと思います。

最初に取り組んだのは直進歩行に関してです。実験では、場所を知らせる音サインが断続音であるのに対し、ずっと音が鳴り続ける「定常音」で、かつ健常者にとって耳障りにならな

卒業生訪問



先輩の大学時代と
これから聞く
卒業生インタビュー

File.2

株式会社きんでん
北海道支社 工事部 工事第二課

仲田 将祥 氏

PROFILE

2017年3月、北海道科学大学電気電子工学科卒業。千歳高校出身。在学中は一戸善弘ゼミに所属。卒業後は株式会社きんでんに入社。1年間の研修期間を経て、最初に担当したのが「北海道科学大学の工学部東棟(F棟)」の施工現場。現在は札幌市内の建設工事に携わっています。

北海道科学大学進学のきっかけ

小さい頃からものづくりが好きでした。モーターで回るものや光るもののが好きで、電池を使って電気工作を作って遊んだり。でも、そういう物たちも電気がなければ動かない…という気づきがこの分野に興味を持つきっかけだったと思います。進学にあたって、電気か情報かで悩んだのですが、ハードウェアにもソフトウェアにも携われるところから電気電子工学科へ進みました。

大学時代の思い出

大学時代は一戸ゼミに所属していました。ゼミでは、太陽光パネルの制作やその計測、また、直流の電源を交流に変えるインバータなどの「ものづくりの研究」を行っていました。見るもの、触れるものがはじめてのものばかりで、最初は「なんだこれは?」と驚くことばかり(笑)。実験の時間も多く、さまざまな学びを通して電気の知識を深めていました。

また、電気電子工学科は資格取得に力を入れていて、国家資格の第一種・第二種電気工事士取得のためのフォローが厚かったですね。筆記試験対策の講座に加え、技能試験のための技術指導もあり、在学中に一種・二種ともに取得することができました。入社してから電気工事士の取得を目指す人もいる中、自分は教える側にまわったり、新しい資格取得のために時間を使うことができています。

仕事のやりがい

就職を考える際、大学の先輩にきんでんのことを教わり、電気設備の業界トップであることと、入社してから1年間の研修期間が設けられていることが決め手でした。研修後、最初に担当したのが北海道科学大学の工学部東棟。はじめての担当が母校になるとは思いませんでしたが、嬉しくありました(笑)。その後、現在は札幌市内の建設工事を担当しています。この現場は北海道支社が携わる中でもかなり大規模であり、高い施工力や技術力が求められる現場なのだと感じています。

これは得意だ!

という自分の強みを、

学生時代に

見つけてください。



後輩へのメッセージ

昨年の大震災で電気が止まってしまい、その時初めて震災対応を経験しました。とある物流センターから、電気が使えないため荷物が出せないと連絡があり、発電機を用意したり、電線をつないで電気を使えるようにしたり。電気がないとお風呂にも入れないし、エレベーターも動かない、何より情報が収集できない。電気がいかに人の生活になくてはならないものかを自覚しましたし、インフラの重要性を目の当たりにしました。人々の生活の根底を支える仕事にやりがいは尽きません。

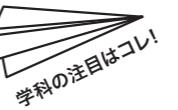
高校時代や大学入学もない頃は、なかなか具体的な目標を持つことは難しいかも知れませんが、いろんなものに興味を持って、自分の得意分野を見つけてください。これが得意!と自信を持って言えるものが見つかれば、そこから将来の糸口が見つかるのではと思います。

学生時代にタイムスリップ!



中学、高校、大学とソフトテニス部に在籍していた仲田さん。同じ学科の佐藤さんとペアを組み、遠征試合に出かけていました。今も交流があり、大学のサークルで汗を流すこともあるそう。

学科だより



北海道科学大学の14学科から、今回は下記の5学科にスポットを当てて、学科の最新ニュースをお届けします。

今回は、**情報工学科** **理学療法学科** **診療放射線学科** **臨床工学科** **人間社会学科** の5学科を紹介！



工学部 情報工学科 保健医療学部 理学療法学科

まちかどキャンパスで、医工連携研究を紹介しました。

9月14日(土)紀伊國屋書店札幌本店にて、今年度第3回北海道科学大学まちかどキャンパスを開催しました。今回は「ITが支える元気な身体～Kinectを用いた運動支援～」をテーマに、本学が推進している医工連携研究の一つである運動機能計測への情報技術の応用について、情報工学科の稻垣潤教授と理学療法学科の佐藤洋一郎准教授が共同研究による成果を紹介しました。

前半は、高齢になっても健康的に日常生活を送るための予防運動の紹介や、運動を行う上での注意点についてレクチャーがありました。例えばスクワットは、足の筋肉を鍛えるには手軽で効果的な運動ですが、間違った姿勢で行うとケガの原因となります。正しい姿勢でスクワットを行うには、理学療法士やトレーナーなどの専門家に姿勢を確認してもらい指導を受けることが望ましいのですが、自宅で運動を行う場合はそれが困難です。そこで、理学療法学科と情報工学科がタッグを組み、センサーやコンピュータといった情報機器を使って、運動中の姿勢の分析や正しい姿勢の指導が行えるシステムを開発しました。このシステムを開発することになったきっかけや、共同研究を進めている間に得られた気づきなどについて、トークショー形式で両教員からお話をされました。

後半は、開発したスクワット運動の姿勢指導アプリケーションを参加者の方々に実際に体験してもらいました。また、これとは別に開発した座った状態での姿勢を分析するシステムについても体験していただき、佐藤准教授から分析結果をもとにしたアドバイスがありました。参加した方からは「正しい姿勢でスクワット運動を行うのは意外と難しい」「自分が思っていたより肩の高さが違うことが分かりました」といった感想が聞かれました。



▲スクワットに挑戦する参加者や、Kinectを使ったゲームを楽しむ参加者。
次回は11月24日(日)開催予定の
『柳宗悦 民藝紀行』でたどる日本の手仕事
(講師:人間社会学科 梶谷崇 教授)です。



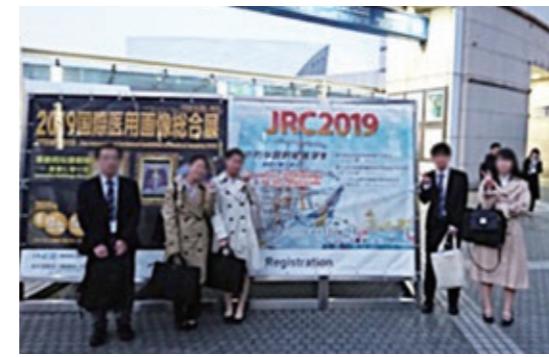
保健医療学部 診療放射線学科

日本最大の学会で、本学学生と大学院生が卒業研究の成果を発表しました。

4月11日(木)～14日(日)、神奈川県横浜市のパシフィコ横浜で開催された「第75回日本放射線技術学会総会学術大会」及び「第117回日本医学物理学会学術大会」に今年多くの診療放射線学科の学生及び教員が参加しました。この学会は、医師、診療放射線技師、医学物理士などさまざまな放射線専門職に加え、医療機器メーカーも参加する放射線医学分野において本邦最大の学会です。

今回、診療放射線学科の4年生8名と大学院生1名が、卒業研究を中心とした研究成果を発表しました。うち3名は初めての発表にも関わらず流暢な英語で発表することができました。大学院生以外の学部4年生8名は初めての学会発表で非常に緊張していましたが、次世代の診療放射線技師として頼もしく感じました。

本学では、診療放射線技師の養成施設としての教育のみならず、今後も社会に貢献できる人材育成のため、研究活動にも力を入れて参ります。



▲学会に参加した学生と教員。

保健医療学部 臨床工学科

夏季休業中も、臨床工学科の学生は目標に向かって勉強の毎日を過ごしています！

1年生は夏季休業期間中の8月に臨床工学技士の仕事を知るべく病院見学に出かけます。今年度も札幌市内ほか道内各地、また道外の30施設以上の病院にご協力いただき実施しました。病院で初めて臨床工学技士の仕事を目にする学生が多く、臨床実習ながらの緊張感で臨みます。2年生は9月上旬に国家試験の登竜門となる、「第2種ME技術実力検定試験」を受験します。普段はアルバイトをしている学生でも、この時期にはアルバイトを休んで勉強に時間を費やします。

臨床実習に進むための条件として医学部や歯学部、薬学部などで実施されるOSCE(客観的臨床能力試験)を臨床工学科でも取り入れています。7月下旬に実施したOSCEに合格した3年生にとって、夏季休業期間は11月からの臨床実習に向けて、これまでの知識を確認する重要な時期。そのため、夏季休業中でもグループで集まって、実習分野ごとにノートにまとめている姿が学内で見られます。

そして4年生は就職活動と国家試験にむけての勉強があります。春から月に一度、国家試験の模試を受けますが、毎回満足のいく結果を出せるように、ゼミ室に集まって勉強をしています。卒業後は血液浄化業務、ICU(集中治療室)や手術室での業務、人工心肺業務などに携わりながら病院やクリニックで働く、または医療機器メーカーに勤務するなどの選択肢があるため、自分の興味や適性などを考慮しながら、卒業後の自分の進路について考えるとともに、卒業研究に取り組みます。

臨床工学科の学生にとって、夏季休業はアルバイトなどの社会勉強も含めて自分を磨くための格好の時期と言えそうです。



未来デザイン学部 人間社会学科

“TRUE”アクティブラーニングを実践する、人間社会学科の学生たち。

「アクティブラーニング」とは何でしょうか？講義中に、学生がグループになって、人によっては笑顔で、意見を出し合って活発にやっていること(を教員に見せること)でしょうか。それは見た目にはアクティブのようですが、場合によってはF-A-K-Eです。

人間社会学科の1年生は、学科独自の科目でディベートを行います。写真のとおり、教員がスライドを見せて話し続ける講義形式ではなく、学生が主役で、およそ30分間、学生の発言だけで討論が繰り広げられます。笑顔は不要です。それより大切なのは、自分たちの主張の確かさです。根拠となる証拠資料(エビデンス)、分かりやすい論の展開によって聴衆の学生を説得し、自分たちへ投票させるのがゴールです。



▲ディベートの準備に取り組む学生たち。

ディベートをする学生にアクティブラーニングが成立するのは、30分間の試合本番だけではありません。むしろ本当のアクティブラーニングは、チーム内の準備段階にこそ発生します。あるチームは試合の何週間も前から、E棟1階のラウンジに集まり、夕方2時間以上も議論を練り3分間のスピーチを作り、またあるチームは自分たちが何を主張するかより前に、逆の立場の相手が何を主張するかを想定して、それに対する戦略を練ります。これらは教員の指示やお膳立てなしで起こる学びです。そして、これらの準備活動こそ真のアクティブラーニングです。

準備段階での学びの深さを教員が知る方法、それはディベート終了後の振り返りのレポートです。講義時間内のディベートが「動」なら、事後に書く振り返りは「静」です。書くことは自己に対して能動的になる場です。切々と伝わってくる準備段階の様子を読んでいると、放課後にメンバーが集まって話し合いをしている姿が浮かんできます。

真のアクティブラーニングは、皮肉なことに教員がいない教室外で起こり、個の内部で静かに深化していくものと言えます。

次回は、**機械工学科** **都市環境学科** **看護学科** **義肢装具学科** **自動車工学科** の5学科が登場。

模型部

ようこそ!

模型部のある道内の大学では最多人数という、44名の部員が所属する北科大模型部。取材にお伺いした日は、年に一度開催される道内最大級の模型展示会、「北海道モデラーズエキシビション(HME)」の大会前日。大会出品作品への思いや意気込み、普段の部活動の様子などを、須藤部長に伺いました！

DATA
〈部長〉 須藤 裕樹さん(電気電子工学科3年)
〈所属人数〉 44名
〈目標〉 年に一度の「北海道モデラーズエキシビション」で入賞するのが毎年の目標！



▲男子の夢が詰まった！？模型部の部室。約半数の学生は初心者からの入部。模型の塗装に便利なエアブラシも自由に使えます。



▲「ミリタリーのジオラマ」は、歩兵の数に注目！体のパーツや小物をひとつずつ組み合わせて、100体の歩兵を作りました。

▲「ガンダムのジオラマ」のこだわりは、発射台に電飾を巡らせたこと。電気電子工学科の部員ならではの見せどころ！

年に一度の模型展示会への出品は、

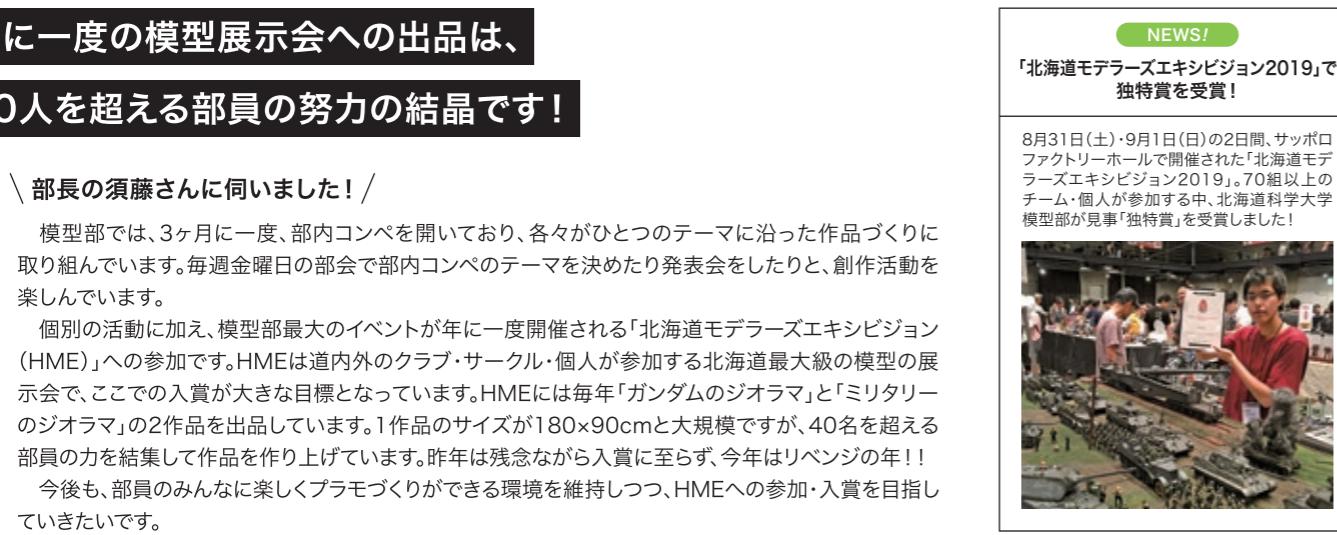
40人を超える部員の努力の結晶です！

＼ 部長の須藤さんに伺いました！／

模型部では、3ヶ月に一度、部内コンペを開いており、各々がひとつのテーマに沿った作品づくりに取り組んでいます。毎週金曜日の部会で部内コンペのテーマを決めたり発表会をしたりと、創作活動を楽しんでいます。

個別の活動に加え、模型部最大のイベントが年に一度開催される「北海道モデラーズエキシビション(HME)」への参加です。HMEは道内外のクラブ・サークル・個人が参加する北海道最大級の模型の展示会で、ここでの入賞が大きな目標となっています。HMEには毎年「ガンダムのジオラマ」と「ミリタリーのジオラマ」の2作品を出品しています。1作品のサイズが180×90cmと大規模ですが、40名を超える部員の力を結集して作品を作り上げています。昨年は残念ながら入賞に至らず、今年はリベンジの年！！

今後も、部員のみんなに楽しくプラモづくりができる環境を維持しつつ、HMEへの参加・入賞を目指していきたいです。



NEWS!

「北海道モデラーズエキシビション2019」で
独特賞を受賞！

8月31日(土)~9月1日(日)の2日間、サッポロファクトリーホールで開催された「北海道モデラーズエキシビション2019」。70組以上のチーム・個人が参加する中、北海道科学大学模型部が見事「独特賞」を受賞しました！



2日間で8403名の方が来場！ 第52回「稻峰祭」を開催しました。

9月28日(土)・29日(日)の2日間、本学を会場に、第52回となる大学祭「稻峰祭」を開催しました。稻峰祭は、在学生や卒業生の参加はもちろん、近隣住民の方々にも開かれた大学祭で、両日ともに世代を超えた多くの方にご来場いただきました。

28日(土)は、腕相撲ナンバー1を決める「マスカルファイト」やのど自慢大会の「歌星王」、図書館では桂三段氏を招いた「図書館寄席」などを実施。29日(日)は、YOSAKOIソーラン部 相羅の演舞や、Human Beat box同好会のステージのほか、3組のゲストミュージシャンを迎えた稻峰祭スペシャルライブを行い、どのステージも大いに盛り上がりされました。

屋内外の会場共に、キャンパス内は終始活気に満ち溢れ、来場者の方に楽しんでいただくことができました。



▲28日の「マスカルファイト」と、29日に行われた「YOSAKOIソーラン部 相羅」の演舞の様子。



「しおりデザイン」を募集しました。

5月7日(火)～6月28日(金)の期間、本学の学部生・短期大学部生・大学院生を対象として、図書館イベント「しおりデザイン募集」を実施しました。

このイベントは図書の貸出時に渡す「しおり」のデザインを募集したもので、本学学生の読書のきっかけ作り、図書館への意見募集、図書館利用の活性化を目的として、2017年度から行っています。

3回目の開催となる今回は、13名から応募がありました。力作揃いの応募作品の中から審査員がデザインや独創性などを審査し、4名の受賞者が決定しました。



受賞者

薬学科3年 松實 葵さん

メディアデザイン学科1年 小川 夕喜子さん

自動車工学科2年 山村 裕美さん

メディアデザイン学科1年 中川 苍瞬さん



10月2日(水)には表彰式が行われ、診療放射線学科の熊澤誠志学術情報センター長から受賞者に対し賞状及び記念品が手渡されました。受賞者4名のデザインを使用したしおりは、図書館カウンターにて配布中です。

◀左から松實さん、山村さん、小川さん、中川さんが制作したしおりのデザイン。

法人創立100周年に向けた カウントダウンロゴマークが決定しました！

本学の設置母体である学校法人北海道科学大学は2024年に創立100周年を迎えます。

私たちは創立100周年を迎えるにあたり、+Innovationをコンセプトとして、新たにカウントダウンロゴマークを決めました。HUSと右肩上がりのラインは、2024年とその先の未来に向けた躍進を、「100」の文字を構成する三角形は学校法人北海道科学大学グループの各学校学部学科及び各組織などを表しており、広がりを持たせることで躍動感を表現しています。グループ内でさまざまなイノベーションが展開される2024年以降の学校法人北海道科学大学を表現しました。



2024年・100周年
と共に未来をつなぐ